

は、地元地域が福祉に対して理解がなく自法人で全てをやらないといけないと思っていたそうですが、前述の「ぷろぼの」の取り組みを知る機会があり、衝撃を受けたという事でした。

ぷろぼのから、電子機器部品の仕分け、パソコン修理・販売のノウハウを学ぶ事により、次々と仕事が発展していき、それらの受け継いだノウハウを現在では、前述の市川レンコンの会に伝え、その縁で市川レンコンの会のジャムを自立支援センターむくで委託販売をするといった相互連携の報告がありました。

分科会の最後には、助言者の全国事業所協議会 近畿ブロック運営委員 白杉 滋郎 氏からは、3事業所とも地域の中で無くてはならない存在になっている。企業も多く参戦しているが、事業所だからこそ提案できるもの、障がい者だからできるものがあるのではないかと。「弱さ」や「課題」があるからこそ制度環境を整えることができる。障がい者のためだけではなく、いろいろな方が働きやすくなるのではないかと締めくくられました。

またコーディネーターの朝日氏からは、他法人からいいところを学び、他業種とビジネスパートナーとなれば、おのずと工賃向上につながります。制度に振り回されるのではなく、常にアンテナをはり、工賃向上だけを目的するのではなく、そのプロセスが大切に振り回されるのではなく、自分たちで制度を作っていく事が大切だと話され分科会は終了しました。

第2分科会では、「法人内」「他法人」「異業種」との連携の大切さ、利用者が能力に合わせて仕事をするだけでなく、利用者の興味があることを仕事にする大切さを学びました。地域で無くてはならない存在になれるよう、さらに努力していかなければいけないと再確認いたしました。



**第3分科会「“老い”を支える事業」に参加して
就労継続支援B型はばたく 仲里 和馬**

第3分科会では、①障害福祉サービス事業所は介護保険とどのように向き合うか ②住まいの場の変化

と支援 ③家族の支援力が落ちた時に誰がどのように補うのかの3つの切り口から、高齢になった知的障がい者の「老い」を支える事業のあり方を検討しました。

コーディネーターの筑波大学 助教 大村 美保 氏のもと、シンポジストの(社福)にりん草【東京都板橋区】の「はすね作業所」 山崎 憲司 氏、(社福)福岡市手をつなぐ育成会【福岡県福岡市】の「ひまわりハウス」統括施設長 荒井 晃紀 氏、(社福)上田しいのみ会【長野県上田市】理事長 村上 恒夫 氏にご出題いただき、助言者としては全国事業所協議会 会長であり、中国ブロック運営委員でもある三上 正浩 氏にお話しいただきました。

障がい福祉サービス事業所は介護保険とどう向き合うのかについては、「いつから高齢になるのか」という問いがありました。最初は些細な変化から始まり、例として「わかりきったことを何度も確認する。」「言い方がきつくなり人間関係が悪くなる。」「慣れた作業で左右、上下を間違える。」などが挙げられ、それに身体的な問題が加わると高齢化問題が表面化してくるとのことでした。先ほどの変化に加え、骨折や排泄の介助が必要になってきたり、転倒を繰り返すなどとなってくると高齢化のスピードは速くなってくるということでした。

ここでのポイントは知的障がいの高齢化に、身体的な問題を加えず知的障がいで問題か、身体的な問題なのかを切り離して考え、また転ばない身体作りの支援が必要で、理学・作業療法などのスキルや日ごらの活動の中にロコモーショントレーニング(スクワット、片足立ち、かかと上げ)なども取り入れると良いとされ、医療連携も活用し、信頼できる医師を巻き込んでいくことが必要になってくるということでした。

介護保険に移行した利用者の事例では、68歳の女性で就労継続支援B型に通所されている方で、グループホーム主催のコンサートにて転倒し、大腿骨を骨折してしまいました。手術後入院され、作業所に復帰されましたが、歩行が不安定になりそれがきっかけで仕事に対しての意欲が低下していき、また周りの利用者とも距離ができ疎外感を感じるようになり、それに伴いご家族の介護の負担が増加しました。こうした状況から介護保険の利用に向けて支援を進めるが、ご家族には介護保険制度や通所施設の知識が全くなく、まずは見学から情報を提示していき、そこで趣味的な活動が多いデイサービスを気に入り移行となった事例が挙げられました。